

- 大正<sub>6</sub>/450 vol. 24 P/870  
 (8) 仏教文学物語 深浦正文著 参照  
 (9) 観無量寿経 大正<sub>6</sub>365 vol. 1/2, P34Qa  
 (10) 同 大正<sub>6</sub>365 vol. 1/2, P34/b  
 (11) 仏教経典成立史論 八一頁 井信享著  
 (12) 観無量寿経 大正<sub>6</sub>365 vol. 1/2, P34/b  
 (13) 仏教経典史論 四三一頁 赤沼智善著に鼻奈耶につ  
 つて次の如くうつさる

「鳩摩羅仏提が前秦の建元十八年（西紀三八二年）に支那に連れて来た罽賓の耶舎が誦出したものであり、仏提梵書し、竺仏念が訳出し、曇景が筆受したものである。」  
 (14) 観無量寿経 大正<sub>6</sub>365 vol. 1/2, P346a  
 (15) 同 大正<sub>6</sub>365 vol. 1/2, P346b

— 以上 —

## 阿彌陀經石に関する一考察

村 島 邦 俊

福岡県宗像郡玄海町田島には宗像神社があり、その境内の小堂には「阿彌陀經石」が安置せられている。此の經石は、屋根石、碑石基礎の三部より成つて居り、古来、珍重され、国宝に指定され、その存在は、広く世の人の知る所である。またこの經石は、仏教史上幾多の問題点を有し、古来、数々の研究がなされている。筆者も今回、「阿彌陀經石の研究」を卒業論文の課題として選んだのであるが、以下はその一端を述べたい。

と思う。即ち經石裏面刻文の阿彌陀經が、他に見られない二十一文字を含む事や、正面刻文の第十八願に、唯除の一句を欠ぐ事、また六字名号と、十八、十九、二十の三願文や、彌陀像等の並刻など、經石の刻文の内容問題については、既に研究も充分なされており、今回の研究ではそれほど、新しい結果を得たとは言へない点であるから、これらの問題は省き、阿彌陀經石が、宗像に存するが故に生ずる問題を、主として考え

てみたいと思う。

阿彌陀經石には、江戸中期以後、遍く行なわれて来た伝説がある。それを要約すれば、大体次の通りである。治承年中に、平重盛が、宋の育王山に、金三千兩を寄進した。重盛の没後、その靈を弔ふ為に、宋より此の經石と一切經を積み、建久九年の秋、宗像の江口に置船したが、その時は、既に平氏も亡び、上洛しても、受取人のなき事を、宋の使者は聞きて、その經石と一切經を、宗像神社に託して、帰国した。或いは放置して逃げ去つたとも言ふ。此の伝説の出所は、宗像記、宗像軍記、であろうが、これらは両書共、編者、年代共に不明である。

重盛の送金の事は、平家物語、源平盛衰記にも出て居り、当時の我が国に於ける育王山信仰の盛んなりし事は、重源の舍利殿修理<sup>2)</sup>、その外遊談、実朝の渡宋計畫<sup>4)</sup>、等で充分に証明される所であり、金遼の南下に依つて、五台山への参詣不能となつた当時の宋人は、新たな、信仰対象として育王山を求め、当時の末法意識に依る仏舍利信仰が、一層育王山への信仰に拍車をかけ<sup>15)</sup>我が国に於ても、盛んであつた事から、重盛の送

金は否定出来ない所であらう。しかし、これを阿彌陀經石と結びつける根拠は全く存しない。現在、經石の何処を見ても、重盛との關係を示すような文字は見当らず、平家物語や盛衰記と、經石の伝説には、それぞれ多少の相違がある。即ち、送金の使者を、平家物語の「金渡」では、鎮西の船頭妙典とし、源平盛衰記の「育王山送金事」は唐人妙典とし、經石の伝説は、宗像大官司、氏国の家臣で、許斐忠太妙典入道としてゐる<sup>16)</sup>。

經石の形容、刻文の書風、石質等から見ても、この經石は宋人の作たる事は異論を許さない所である。我が国に現存する宋風石造遺としては、東大寺再建の目的に來朝した宋人石工やその子孫の作品<sup>17)</sup>その他、宗像神社藏狛犬(建仁元年)、京都嵯峨二尊院の空公行状碑<sup>18)</sup>等があり、阿彌陀經石もこれらの一群に列せらるべき存在であり、特に、東大寺南大門の石獅子の台座に施したる蓮弁は、阿彌陀經石の基礎のそれと、全く同様式のものであり、我が国の現存遺品中では他にその例を見ないものである。此の石獅子に就いて、「東大寺造立供養記」には、次の様に記している。

建久七年 中門石獅子 堂内石脇士

同四天像、宋人字六郎等四人造之

若日本国石難造 遣価直於大唐

所買求也、運賃雜用等凡三千余石

阿彌陀經石が宋人の手にかゝるものである事は、間違いないと云えるが、此の東大寺の例よりしても、經石を宋からの渡來品と決める事は出来ない。まして宗像は、奈良よりも宋に近く、石材を求めたり、石工を招くにも容易な筈である。

斯くの如き阿彌陀經石を、不明確な重盛と結びつけた伝説よりも、むしろ、宗像神社の大官司を世襲する宗像氏一族は、宋と密接な關係を有するのである。

阿彌陀經石は、その内容からして、高度の彌陀信仰の遺品たる觀を受ける。然らば、宗像氏を中心とする當時の此の地方に於ける信仰が、此の經石を産み出したものと考える事が出来るであろうか。以下は、此の地方の遺品の中から、經石と同時代と思われるものを挙げて見る事にする。先づ、神宮寺である鎮国寺には、石仏（元永二年）、宗像五社本地仏磨崖種子及び磨崖増益炉（平安末期）、經筒（保延四年）、靈鷲窟天井

胎藏界磨崖種子曼荼羅（平安末期）、靈鷲窟請雨法曼荼羅石（弘長三年）等がある。他に稻本已藏經筒（仁平十一年）、赤間經瓦等がある。鎮国寺石仏の「金銅阿彌陀像數体」等の文字や經石の追刻文に「わうしよくくらく」等の文が見えるが、阿彌陀經石は、日本淨土教の祖師により説かれた教えを、表わしたが如き遺品であり、これらの諸遺品と、同一視する事は出来ない。又神社から程近い興聖寺には有名な、色定法師一筆書写一切經を蔵している。色定は、良祐とも云い、宗像神社の座主、兼祐の子で、(4) 文治三年（一一八七）より、四十余年の歲月を費して、各地を遊歴しつゝ、一切經の書写に専念したのである。その經巻も、明治以前は神社に蔵していたのであるが、その奥書にも、阿彌陀經石に就いては見当らず、阿彌陀經石を産み出すが如き信仰をうかがうことはできない。

此の様に考えるならば、此處で當時の淨土教家に就いて考えなければならないが、それには、地域的にも、当然、辯阿上人（一一六二—一二三八）を挙げなければならない。然しながら、阿彌陀經石と上人との關係

は、全々見出せない。現在筑後の善導寺には、鎮西上人在世当時の書写である浄土三部経がある。その中の阿彌陀経が、宗像の経石と同じ二十一字を含むものであるが、二十一字を含む阿彌陀経に関しては、その昔、中国の襄陽に存した事が、王日休<sup>(1)</sup>元照<sup>(2)</sup>戒度等<sup>(3)</sup>に依つて紹介され、法然上人も、王日休の浄土文を選釈集に引用されており<sup>(4)</sup>此の写経を、直接宗像の経石と結びつける事は許されない。次に西宗要巻二には次の様に記している。

弁阿西国下諸経蔵尋ムナカタノ杜一切経蔵大乘莊嚴  
經勘其中卷十方恒沙諸仏出広長舌相証誠文明有之云  
云

この事から、上人が、宗像神社に行かれた事は解るが、経石の存在は判明しない。経石の追刻文からしてそれが少くとも、承久二年(一二二〇)以前に、宗像に存した事が知れるが、西宗要の著作年代に就いては、建久八年(一一九七)より嘉禎三年(一二三三)の間である事が知れるのみである。然しながら、これに依つて、この二者は、ほぼ同時代と思われるが、当時経石が神社の境内に、安置されていたものならば、上人の

目に止らぬ筈はないが、上人の著作中に経石の存在を記されたものは見当らない。或いはその当時、経石は他の場所に安置していたと言う伝説を信すべきであろうか、此の善導寺の三部経巻には、阿彌陀経のみに次の様な跋文がある。

弁阿大和尚

如法経加行衆

一和尚 湛惠大徳

二和尚 良秀大徳 三和尚 明若大徳

四和尚 業 正 大徳 五和尚 良遍々

六和尚 明賀大徳 七和尚 二郎 □

願以此結縁書写之功為一仏 □ 浄土之

来縁而云

これら七人の人々についても全く不明であり、以上の如き資料では、鎮西上人と阿彌陀経石を結びつける事は出来ない。然しながら、此の両者の関係の有無は別としても、この様な阿彌陀経が、如法経として書写された事は、我が鎮西教学にとつて、重要な問題であろうと思う。

阿彌陀経石を産み出した信仰を、高度の浄土教信仰

と考へ、それを當時の宗像氏を中心とする此の地方に求めることは出来ないにしても、宗像氏に就いて考へれば、それは前時代の日隋、日唐に比して、私的交流と言われる日宋交通時代の地方の一豪族であり、密接に宋との關係を有するのである。即ち、經石の右側面の追刻に見える「王氏」、「張氏」は宗像氏とは血縁關係にあり、左側面の追刻文には、「地頭張氏寄進狀」の文字がある。又、色定法師の写經の奥書に、しばしば、經主綱首張成、墨檀越李榮等の宋人の名が出て来る。斯くの如く、一生を費した大事業である色定写經の財源が宋人にあつたり、地頭職にあるものが宋人姓を名乗る事は、當時の此の地方に於いて、多数の宋人在住が考えられる。また、寛喜年間（一二二九—一二三二）に、往阿と言う人が、芦屋から新宮浜迄の海岸に難破する船を以て、宗像神社の造営費に当てゝいた習慣を、非人道的とし、これを止めせしめ、鐘崎に築港した。往阿は、此の収入に代るものを太宰府に申出て、修理結田曲村四十町を受けた。此の広大な面積からして、當時此の海岸に難破する船が如何に多かつたかが推り知られよう。又、宋から宗像に来るのに、如

何に潮流に恵まれていたかが察せられよう。

此の様な状態の中にある宗像氏が、若し阿彌陀經石を宋に求めたとするならば、それは至極用易に得る事が出来たであらう。また、此の阿彌陀經石を、仏教の信仰遺品とのみ考える事は危険と言わねばならない。此の阿彌陀經石は、その刻む經文は、優れた書風を有し、その全体の形は整然として美觀を有し、仏像は異国の風潮を漂わせている。それは、芸術的、趣味的要素を含む事、極めて大である。

斯くの如く考える時、宗像氏の将来説は、大いに考えらるべき所であり、宗像氏の対宋關係と經石とは全く不可離の關係にあると言わねばならない。然るに、これを明かすには先づ、複雑な宗像氏と宋との關係を極めなければならぬ。以下は今後の研究に待つ事を止むなしとしても、此処で次の様な疑問を提起しなければならぬ。それは、阿彌陀經石が宗像に存する事を、最初に記したと思われるのは、宗像記、宗像軍記であるが、これらは前述の如く、編者も年代も不明である。恐らくは、慶長から江戸初期の間に成立したと思われる。次に明瞭なものは、義山（一六四八—一七

一七)の「阿彌陀經隋聞講錄」である、經石の右側面の追刻文からして、阿彌陀經石が、宗像に安置されたのは少くとも承久二年(一二二〇)以前とすれば、その間に、四百年以上の開きがある。それ迄、何故經石の存在が世に知れなかつたのであろうか、全く不可解な事である。

註

- (1) 一心不乱以下に「專持名号以称名故諸罪消滅即是多善根福德因縁」の一句
- (2) 南無阿彌陀仏作善集
- (3) 玉葉、寿永二年正月廿四日の条
- (4) 吾妻鏡、建保四年六月十五日、十一月廿四日、建保五年四月十七日の条
- (5) 育王山は阿育王八萬四千塔の一基を安置していると云われていた。

- (6) 鎮西禪師絵詞伝第七の船板名号の伝説に出て来る宋の船頭も妙典としている。
- (7) 東大寺南大門石獅子、同法華堂伊行末石燈籠、新大仏寺大仏基壇、般若寺笠塔婆等
- (8) 大宋国慶元府打石梁成覚刊
- (9) 真言宗御室派、福岡県宗像郡玄海町吉田建久八年正月十六日の跋
- (10) 龍舒増広浄土文卷第一、大正蔵第四十七、二五七、頁上
- (11) 阿彌陀經義疏、大正蔵第三十七、三六一頁下
- (12) 阿彌陀經義疏聞持記卷下、上続蔵 第一輯第三十三套第二冊一三五頁 下
- (13) 浄土宗全書第七、六十二頁
- (14) 浄土宗全書第十、百五十一頁
- (15) 訂正宗像大官司系譜
- (16) 阿彌陀經石も、こうした難破船の渡来品ではないかと疑う余地もある。

以上